

---

# urllib パッケージを使ってインターネット上のリソースを取得するには

リリース 3.13.5

Guido van Rossum and the Python development team

8 月 05, 2025

## 目次

1	はじめに	2
2	URL を取得する	2
2.1	データ	3
2.2	ヘッダ	4
3	例外を処理する	5
3.1	URLError	6
3.2	HTTPError	6
3.3	エラーをラップする	7
4	info と geturl	8
5	Openers と Handlers	9
6	Basic 認証	9
7	プロキシ	11
8	ソケットとレイヤー	11
9	脚注	12
	索引	13

---

## 著者

Michael Foord

## 1 はじめに

### Related Articles

同じように Python でインターネットリソースを取得するのに以下の記事が役に立ちます:

- [Basic Authentication](#)

*Basic 認証* についてのチュートリアルで Python の例がついています。

`urllib.request` は URLs (Uniform Resource Locators) を取得するための Python モジュールです。このモジュールはとても簡単なインターフェースを `urlopen` 関数の形式で提供しています。また、このモジュールは一般的な状況で利用するためにいくらか複雑なインターフェースも提供しています - basic 認証やクッキー、プロキシ等。これらは handler や opener と呼ばれるオブジェクトとして提供されます。

`urllib.request` は多くの "URL スキーム" (URL の ":" の前の文字列で識別されるもの - 例えば "`ftp://python.org/`" では "`ftp`") の URL を、関連するネットワークプロトコル (例えば FTP, HTTP) を利用することで、取得できます。

単純な状況では `urlopen` はとても簡単に使うことができます。しかし HTTP の URL を開くときにエラーが起きたり、特殊なケースに遭遇すると、HyperText Transfer Protocol に関するいくつかのことを理解する必要があります。HTTP に関して最も包括的で信頼できる文献は [RFC 2616](#) です。この文書は技術文書なので簡単には読めません。この HOWTO の目的は `urllib` の利用法を例示することです、HTTP についてはその助けになるのに十分に詳しく載せています。このドキュメントは `urllib.request` のドキュメントの代わりにはなりませんが、補完する役割を持っています。

## 2 URL を取得する

`urllib.request` を利用する最も簡単な方法は以下です:

```
import urllib.request
with urllib.request.urlopen('http://python.org/') as response:
    html = response.read()
```

URL によってリソースを取得し、それを一時的な場所に保存しておきたいときは、`shutil.copyfileobj()` と `tempfile.NamedTemporaryFile()` 関数を使って行うことができます:

```
import shutil
import tempfile
import urllib.request

with urllib.request.urlopen('http://python.org/') as response:
    with tempfile.NamedTemporaryFile(delete=False) as tmp_file:
        shutil.copyfileobj(response, tmp_file)
```

(次のページに続く)

```
with open(tmp_file.name) as html:
    pass
```

多くの urllib の利用法はこのように簡単です ('http:' の代わりに URL を 'ftp:' や 'file:' 等で始めればできます)。しかし、このチュートリアルのは、特に HTTP に絞って、より複雑な状況を説明することです。

HTTP はリクエスト (request) とレスポンス (response) が基本となっています - クライアントがリクエストし、サーバーがレスポンスを送ります。urllib.request はこれを真似て、作成する HTTP リクエストを表現する Request オブジェクトを備えています。リクエストオブジェクトを作成する最も簡単な方法は取得したい URL を指定することです。urlopen をこのオブジェクトを使って呼び出すと、リクエストした URL のレスポンスオブジェクトが返されます。このレスポンスはファイルライクオブジェクトで、これはつまりレスポンスに .read() と呼び出せることを意味しています:

```
import urllib.request

req = urllib.request.Request('http://python.org/')
with urllib.request.urlopen(req) as response:
    the_page = response.read()
```

urllib.request は同じリクエストインターフェースを全ての URL スキームに対して利用できるようにしています。例えば、FTP リクエストの場合はこうできます:

```
req = urllib.request.Request('ftp://example.com/')
```

HTTP の場合には、リクエストオブジェクトに対して二つの特別な操作ができます: 一つ目はサーバーに送るデータを渡すことができる、二つ目はサーバーに送るデータやリクエスト自身に **についての特別な情報** ("metadata") を渡すことができます - これらの送られる情報は HTTP 「ヘッダ」です。今度はこれらに関してひとつひとつ見ていきましょう。

## 2.1 データ

URL にデータを送りたい場合はよくあります (しばしば、その URL は CGI (Common Gateway Interface) スクリプトや他の web アプリケーションを参照することになります)。これは HTTP では、**POST** リクエストとして知られる方法で行なわれます。これは web 上で HTML フォームを埋めて送信するときにブラウザが行なっていることです。全ての POST がフォームから送られるとは限りません: 自身のアプリケーションに対して任意のデータを POST を使って送ることができます。一般的な HTML フォームの場合、データは標準的な方法でエンコードされている必要があり、リクエストオブジェクトに data 引数として渡します。エンコーディングは urllib.parse ライブラリの関数を使って行います。

```
import urllib.parse
import urllib.request

url = 'http://www.someserver.com/cgi-bin/register.cgi'
values = {'name' : 'Michael Foord',
```

```

        'location' : 'Northampton',
        'language' : 'Python' }

data = urllib.parse.urlencode(values)
data = data.encode('ascii') # data should be bytes
req = urllib.request.Request(url, data)
with urllib.request.urlopen(req) as response:
    the_page = response.read()

```

他のエンコーディングが必要な場合があることに注意して下さい (例えば、HTML フォームからファイルをアップロードするための詳細については [HTML Specification, Form Submission](#) を見て下さい)。

`data` 引数を渡さない場合、`urllib` は **GET** リクエストを利用します。GET と POST リクエストの一つの違いは、POST リクエストにしばしば、「副作用」があることです: POST リクエストはいくつかの方法によってシステムの状態を変化させます (例えば 100 ポンドのスパムの缶詰をドアの前まで配達する注文を web サイトで行う)。とはいえ HTTP 標準で明確にされている内容では、POST は **常に** 副作用を持ち、GET リクエストは **決して** 副作用を持たないことを意図するけれども、GET リクエストが副作用を持つことも、POST リクエストが副作用を持たないことも、妨げられません。HTTP の GET リクエストでもデータ自身をエンコーディングすることでデータを渡すことができます。

以下のようにして行います:

```

>>> import urllib.request
>>> import urllib.parse
>>> data = {}
>>> data['name'] = 'Somebody Here'
>>> data['location'] = 'Northampton'
>>> data['language'] = 'Python'
>>> url_values = urllib.parse.urlencode(data)
>>> print(url_values) # The order may differ from below.
name=Somebody+Here&language=Python&location=Northampton
>>> url = 'http://www.example.com/example.cgi'
>>> full_url = url + '?' + url_values
>>> data = urllib.request.urlopen(full_url)

```

? を URL に加え、それにエンコードされた値が続くことで、完全な URL が作られていることに注意して下さい。

## 2.2 ヘッダ

ここでは特定の HTTP ヘッダについて議論します、HTTP リクエストにヘッダを追加する方法について例示します。

いくつかの web サイト<sup>\*1</sup> はプログラムからブラウザされることを嫌っていたり、異なるブラウザに対して異なるバージョンを送ります<sup>\*2</sup>。デフォルトでは `urllib` は自身の情報を `Python-urllib/x.y` として扱います ( `x` と `y` は Python のリリースバージョンのメジャーバージョンとマイナーバージョンです、例えば `Python-urllib/2.5` など)。これによって web サイト側が混乱したり、動作しないかもしれません。ブラウザは自身の情報を `User-Agent` ヘッダ<sup>\*3</sup> を通して扱っています。リクエストオブジェクトを作るときに、ヘッダに辞書を渡すことができます。以下の例は上の例と同じですが、自身を Internet Explorer<sup>\*4</sup> のバージョンの一つとして扱っています。

```
import urllib.parse
import urllib.request

url = 'http://www.someserver.com/cgi-bin/register.cgi'
user_agent = 'Mozilla/5.0 (Windows NT 6.1; Win64; x64)'
values = {'name': 'Michael Foord',
          'location': 'Northampton',
          'language': 'Python' }
headers = {'User-Agent': user_agent}

data = urllib.parse.urlencode(values)
data = data.encode('ascii')
req = urllib.request.Request(url, data, headers)
with urllib.request.urlopen(req) as response:
    the_page = response.read()
```

レスポンスは二つの便利なメソッドも持っています。 *info* と *geturl* の節を見て下さい、この節は後で問題が起きた場合に見ておくべき内容です。

### 3 例外を処理する

`urlopen` raises `URLError` when it cannot handle a response (though as usual with Python APIs, built-in exceptions such as `ValueError`, `TypeError` etc. may also be raised).

`HTTPError` is the subclass of `URLError` raised in the specific case of HTTP URLs.

例外クラスは `urllib.error` モジュールから提供されています。

---

<sup>\*1</sup> Google を例題にする。

<sup>\*2</sup> ブラウザを検知すること (browser sniffing) は web サイトのデザインにおけるとても悪い習慣です - web 標準を利用する方が賢明でしょう。不幸なことに未だに多くの web サイトが異なるブラウザに対して異なるバージョンを返しています。

<sup>\*3</sup> MSIE 6 のユーザエージェントは `'Mozilla/4.0 (compatible; MSIE 6.0; Windows NT 5.1; SV1; .NET CLR 1.1.4322)'` です。

<sup>\*4</sup> HTTP リクエストヘッダの詳細については、[Quick Reference to HTTP Headers](#) を参照して下さい。

### 3.1 URLError

URLError が送出されることはよく起こります、それはネットワーク接続が無い場合や、指定したサーバが無い場合です。この場合、例外は 'reason' 属性を持っていて、この属性はエラーコードとエラーメッセージのテキストを含むタプルです。

例:

```
>>> req = urllib.request.Request('http://www.pretend_server.org')
>>> try: urllib.request.urlopen(req)
... except urllib.error.URLError as e:
...     print(e.reason)
...
(4, 'getaddrinfo failed')
```

### 3.2 HTTPError

Every HTTP response from the server contains a numeric "status code". Sometimes the status code indicates that the server is unable to fulfil the request. The default handlers will handle some of these responses for you (for example, if the response is a "redirection" that requests the client fetch the document from a different URL, urllib will handle that for you). For those it can't handle, urlopen will raise an HTTPError. Typical errors include '404' (page not found), '403' (request forbidden), and '401' (authentication required).

HTTP のエラーコード全てについては [RFC 2616](#) の 10 節を参照して下さい。

The HTTPError instance raised will have an integer 'code' attribute, which corresponds to the error sent by the server.

#### エラーコード

デフォルトハンドラーはリダイレクト (コードは 300 番台にあります) を処理し、100-299 番台のコードは成功を意味しているので、たいていの場合は 400-599 番台のエラーコードのみを見るだけですみます。

`http.server.BaseHTTPRequestHandler.responses` is a useful dictionary of response codes that shows all the response codes used by [RFC 2616](#). An excerpt from the dictionary is shown below

```
responses = {
    ...
    <HTTPStatus.OK: 200>: ('OK', 'Request fulfilled, document follows'),
    ...
    <HTTPStatus.FORBIDDEN: 403>: ('Forbidden',
                                   'Request forbidden -- authorization will '
                                   'not help'),
    <HTTPStatus.NOT_FOUND: 404>: ('Not Found',
                                   'Nothing matches the given URI'),
    ...
}
```

(次のページに続く)

(前のページからの続き)

```
<HTTPStatus.IM_A_TEAPOT: 418>: ("I'm a Teapot",
                                'Server refuses to brew coffee because '
                                'it is a teapot'),
...
<HTTPStatus.SERVICE_UNAVAILABLE: 503>: ('Service Unavailable',
                                           'The server cannot process the '
                                           'request due to a high load'),
...
}
```

エラーが起きた場合、サーバーは HTTP エラーコード および エラーページを返して応答します。HTTPError インスタンスはエラーページのレスポンスとして扱えます。これは code 属性だけでなく、urllib.response モジュールが返すような read, geturl, info メソッドも持つことを意味します:

```
>>> req = urllib.request.Request('http://www.python.org/fish.html')
>>> try:
...     urllib.request.urlopen(req)
... except urllib.error.HTTPError as e:
...     print(e.code)
...     print(e.read())
...
404
b'<!DOCTYPE html PUBLIC "-//W3C//DTD XHTML 1.0 Transitional//EN"
"http://www.w3.org/TR/xhtml1/DTD/xhtml1-transitional.dtd">\n\n\n<html
...
<title>Page Not Found</title>\n
...

```

### 3.3 エラーをラップする

So if you want to be prepared for HTTPError or URLError there are two basic approaches. I prefer the second approach.

#### その1

```
from urllib.request import Request, urlopen
from urllib.error import URLError, HTTPError
req = Request(someurl)
try:
    response = urlopen(req)
except HTTPError as e:
    print('The server couldn\'t fulfill the request.')
    print('Error code: ', e.code)
```

(次のページに続く)

```
except URLError as e:
    print('We failed to reach a server.')
    print('Reason: ', e.reason)
else:
    # everything is fine
```

**i 注釈**

The `except HTTPError` *must* come first, otherwise `except URLError` will *also* catch an `HTTPError`.

**その 2**

```
from urllib.request import Request, urlopen
from urllib.error import URLError
req = Request(someurl)
try:
    response = urlopen(req)
except URLError as e:
    if hasattr(e, 'reason'):
        print('We failed to reach a server.')
        print('Reason: ', e.reason)
    elif hasattr(e, 'code'):
        print('The server couldn\'t fulfill the request.')
        print('Error code: ', e.code)
else:
    # everything is fine
```

## 4 info と geturl

The response returned by `urlopen` (or the `HTTPError` instance) has two useful methods `info()` and `geturl()` and is defined in the module `urllib.response`.

- **geturl** - これは取得したページの実際の URL を返します。`urlopen` (または利用される opener オブジェクト) はリダイレクトに追従するため、有用です。取得したページの URL は要求した URL と同じとは限りません。
- **info** - これは取得したページ (特にサーバからヘッダ) を表す辞書風オブジェクトを返します。これは現在では `http.client.HTTPMessage` インスタンスです。

典型的なヘッダは `'Content-length'`, `'Content-type'` 等を含んでいます。HTTP ヘッダの意味と利用法について簡単な説明付きの便利な一覧 [Quick Reference to HTTP Headers](#) を参照して下さい。



## 5 Openers と Handlers

URL を取得する場合、opener (混乱を招きやすい名前ですが、`urllib.request.OpenerDirector` のインスタンス) を利用します。標準的にはデフォルトの opener を `urlopen` を通して - 利用していますが、カスタムの opener を作成することもできます。opener は handler を利用します。全ての「一番厄介な仕事」はハンドラによって行なわれます。各 handler は特定の URL スキーム (http, ftp, 等) での URL の開き方を知っていたり、URL を開く局面でどう処理するかを知っています、例えば HTTP リダイレクションや HTTP のクッキーなど。

インストール済みの特定のハンドラで URL を取得したい場合には、opener を作成したいと思うでしょう、例えばクッキーを処理する opener が得たい場合や、リダイレクションを処理しない opener を得たい場合。

opener を作成するには、`OpenerDirector` をインスタンス化して、続けて、`.add_handler(some_handler_instance)` を呼び出します。

それに代わる方法として、`build_opener` を利用することもできます、これは opener オブジェクトを一回の関数呼び出しで作成できる便利な関数です。`build_opener` はいくつかのハンドラをデフォルトで追加しますが、デフォルトのハンドラに対して追加、継承のどちらかまたは両方を行うのに手取り早い方法を提供してくれます。

追加したくなる可能性がある handler としては、プロキシ処理、認証など、一般的ですがいくらか特定の状況に限られるものでしょう。

`install_opener` も (グローバルな) デフォルト opener オブジェクトの作成に利用できます。つまり、`urlopen` を呼び出すと、インストールした opener が利用されます。

opener オブジェクトは `open` メソッドを持っていて、`urlopen` 関数と同じ様に、url を取得するのに直接呼び出すことができます: 利便性を除けば `install_opener` を使う必要はありません。

## 6 Basic 認証

To illustrate creating and installing a handler we will use the `HTTPBasicAuthHandler`. For a more detailed discussion of this subject -- including an explanation of how Basic Authentication works - see the [Basic Authentication Tutorial](#).

認証が必要な場合、サーバは認証を要求するヘッダ (401 のエラーコードとともに) を送ります。これによって認証スキームと 'realm' が指定されます。ヘッダはこうなっています: `WWW-Authenticate: SCHEME realm="REALM"`。

例

```
WWW-Authenticate: Basic realm="cPanel Users"
```

クライアントはリクエストヘッダに含まれる realm に対して適切な名前とパスワードとともにリクエストを再試行する必要があります。これが 'basic 認証' です。一連の流れを簡単化するために、`HTTPBasicAuthHandler` のインスタンスを作成し、opener が handler を利用するようにします。

`HTTPBasicAuthHandler` はパスワードマネージャーと呼ばれる、URL と realm をパスワードとユーザ名への対応づけを処理する、オブジェクトを利用します。realm が何なのか (サーバから返される認証ヘッダか

ら) 知りたい場合には、HTTPPasswordMgr を利用できます。多くの場合、realm が何なのかについて気にすることはありません。そのような場合には HTTPPasswordMgrWithDefaultRealm を使うと便利です。これは URL に対してデフォルトのユーザ名とパスワードを指定できます。これによって特定の realm に対する代替の組み合わせを提供することなしに利用できるようになります。このことは add\_password メソッドの realm 引数として None を与えることで明示することができます。

トップレベルの URL が認証が必要なはじめに URL です。この URL よりも「深い」URL を渡しても .add\_password() は同様にマッチします。:

```
# create a password manager
password_mgr = urllib.request.HTTPPasswordMgrWithDefaultRealm()

# Add the username and password.
# If we knew the realm, we could use it instead of None.
top_level_url = "http://example.com/foo/"
password_mgr.add_password(None, top_level_url, username, password)

handler = urllib.request.HTTPBasicAuthHandler(password_mgr)

# create "opener" (OpenerDirector instance)
opener = urllib.request.build_opener(handler)

# use the opener to fetch a URL
opener.open(a_url)

# Install the opener.
# Now all calls to urllib.request.urlopen use our opener.
urllib.request.install_opener(opener)
```

#### 注釈

In the above example we only supplied our HTTPBasicAuthHandler to build\_opener. By default openers have the handlers for normal situations -- ProxyHandler (if a proxy setting such as an http\_proxy environment variable is set), UnknownHandler, HTTPHandler, HTTPDefaultErrorHandler, HTTPRedirectHandler, FTPHandler, FileHandler, DataHandler, HTTPErrorProcessor.

top\_level\_url は実際には "http://example.com/" のような完全な URL ('http:' スキームとホスト名、オプションとしてポート番号、含む) **あるいは** "example.com" や "example.com:8080" (後者はポート番号を含む) のような "authority" (つまり、ホスト名とオプションとしてポート番号を含む) の **どちらでも** かまいません。authority の場合には "userinfo" 要素は含んではいけません - 例えば "joe:password@example.com" は不適切です。

## 7 プロキシ

`urllib` は自動でプロキシ設定を認識して使います。これは通常の handler の組に含まれる `ProxyHandler` を通して行なわれます。たいていの場合はこれでうまくいきますが、役に立たない場合もあります<sup>\*5</sup>。この問題に対処する一つの方法はプロキシを定義しない `ProxyHandler` を組み立てることです。この方法は `Basic Authentication` handler を設定したときと同じような流れで行うことができます:

```
>>> proxy_support = urllib.request.ProxyHandler({})
>>> opener = urllib.request.build_opener(proxy_support)
>>> urllib.request.install_opener(opener)
```

### i 注釈

現在 `urllib.request` はプロキシ経由で `https` ロケーションを取得する機能をサポートしていません。しかし、`urllib.request` をこのレシピ<sup>\*6</sup> で拡張することで可能にすることができます。

### i 注釈

変数 `REQUEST_METHOD` が設定されている場合、`HTTP_PROXY` は無視されます; `getproxies()` のドキュメンテーションを参照してください。

## 8 ソケットとレイヤー

Web 上からリソースを取得する Python の機能はレイヤー化されています。`urllib` は `http.client` ライブラリを利用していますが、そのライブラリはさらに `socket` ライブラリを利用しています。

Python 2.3 ではレスポンスがタイムアウトするまでのソケットの待ち時間を指定することができます。これは web ページを取得する場合に便利に使うことができます。`socket` モジュールのデフォルトでは **タイムアウトが無く** ハングしてしまうかもしれません。現在では `socket` のタイムアウトは `http.client` や `urllib.request` のレベルからは隠蔽されています。しかし、以下を利用することで全てのソケットに対してグローバルにデフォルトタイムアウトを設定することができます

```
import socket
import urllib.request

# timeout in seconds
timeout = 10
socket.setdefaulttimeout(timeout)
```

(次のページに続く)

<sup>\*5</sup> 私の場合は仕事中にインターネットにアクセスするにはプロキシを利用する必要があります。`localhost` の URL に対してこのプロキシを経由してアクセスしようとするば、ブロックされます。IE を proxy を利用するように設定すれば、`urllib` はその情報を利用します。`localhost` のサーバでスクリプトをテストしようすると、`urllib` がプロキシを利用するのを止めなければいけません。

<sup>\*6</sup> `urllib opener for SSL proxy (CONNECT method)`: [ASPEN Cookbook Recipe](#).

(前のページからの続き)

```
# this call to urllib.request.urlopen now uses the default timeout
# we have set in the socket module
req = urllib.request.Request('http://www.voidspace.org.uk')
response = urllib.request.urlopen(req)
```

---

## 9 脚注

このドキュメントは John Lee によって査読、改訂されました。

## 索引

R

RFC

RFC 2616, 2, 6